

日本の受託試験機関、仏同業と提携 = エアバスなどの認証取得へ (2020/02/12-19:27)



【シンガポール時事】自動車や航空機関連メーカー向けに素材などの分析や試験を受託する独立系の試験機関、神戸工業試験場（K M T L、兵庫県播磨町）は12日、シンガポールで行われた航空見本市で、同業の仏国営研究機関C e t i m（セティム）と業務提携する協力合意を締結した。セティムの試験技術をK M T Lに移転することで、セティムと関係が深い欧州航空機大手エアバスや仏航空機エンジン製造大手サフランから試験認定の取得を目指す。



調印式に臨む神戸工業試験場の鶴井宣仁専務（左）ら=12日、シンガポール

実現すれば、日系企業にとって欧州系メーカーへの参入障壁となっていた製品の品質証明が日本国内で可能になり、ビジネスチャンスが広がる。K M T Lとセティムは2017年に業務提携を交わしているが、今回の調印をもって具体的に事業を始動させる。

日本の重工業大手にとって、航空機製造分野ではボーイングやゼネラル・エレクトリック（G E）といった米国メーカーとの取引が主力で、欧州系メーカーとの関係は希薄だ。K M T LもボーイングとG Eから試験の認証は受けているものの、エアバスやサフランの認証はなかった。

K M T Lの鶴井宣仁専務は取材に対し「欧州系メーカーの認定を得ることで、日系企業がいつでも欧州系航空機の製造に着手できるようになる」と業務提携の意図を語った。今後はボーイングとエアバスの米欧二大メーカー関連からの受注増を見込む。海外売上高比率を2022年までに現在の約5%から約10%に引き上げる計画だ。これまで海外事業は韓国や中国といったアジアが中心だった。

この他、セティムの先端技術や知識を共有することで、K M T Lが提供する受託試験サービスの幅を広げる。具体的には、歯車（ギア）の耐久性を評価する試験技術をセティムから移転する計画を検討している。日本国内では、ギア試験ができる試験機関が限られており、多くの国内メーカーは試験を国外に委託せざるを得ない状況が続いていた。K M T Lは、航空機業界のほか電気自動車（E V）化が進む自動車業界でも強いニーズがあるとし、実現に向けてかじを切る意向だ。

セティムのマーケティングマネジャー、ビンセント・コレ氏は取材に応じ、「K M T Lの高い専門技術が提携する決め手となった」と話した。セティムは22年までに海外売上高比率を2割に伸ばす方針。現在は約1割にとどまっている。日本や韓国などのアジアで事業を拡大させていきたいと話した。

日仏政府も、航空機産業における両国企業の提携拡大を後押ししている。日本の経済産業省は17年にエアバス、19年にサフランと日本企業との連携強化をする合意書を交わした。取引先の多様化を図ることで、産業の裾野を広げたい意向だ。

K M T Lは1947年創業。日本国内初の独立系民間試験場だ。鶴井専務は「われわれは独立系の試験場で他の大きな資本が入っていない。あらゆる顧客の試験ができることに意味があると思っている」と語った。

（了）